

病害虫の発生概況

(病害発生概況)

稲・麦

イネもみ枯細菌病が九州7県の発生面積113,000ha、発生面積率約40%の未曾有の大発生を記録した。8月中下旬から9月上旬にかけて出穂した早中生品種が主体となって多発生し、作況低下の一主要因となった。出穂時期における高温と適度の降雨による気象条件が多発生の主要因となり、従来の北九州を中心とする発生分布が南九州を含めた九州全域の発生分布を示したことが大きな特徴となった。本病の発生により、不稔粒、登熟歩合がいちじるしく増加し、極端に減収することも往々にしてみられ今後の発生動向および防除対策に十分配慮する必要がある。

葉いもち宮崎、鹿児島早期水稲で5~6月に急進展し多発生したが、7月下旬~8月上旬の高温多照少雨により半年以下の発生にとどまった。普通期水稲は全般的に少発生となった。穂いもち鹿児島早期水稲で多発生したこと、熊本はいぐさ跡地で局部的に多発生した以外は全般に少発生にとどまった。紋枯病は生育後半に高温となったため福岡、佐賀、熊本、大分、鹿児島各県とも多発生し、鹿児島早期水稲でも多発生となった。初発生は半年並~やや遅かったが8月中旬以降の高温多湿により上位進展がいちじるしく多発生となった。白葉枯病は全般的に少発生となり、発生面積率約3.4%は過去10数年間の最低値を記録した。

イネ黄化萎しゆく病が福岡の飯塚、行橋地区で特異的に多発生し、発生面積1,514ha、うち甚発生面積330haとなりいちじるしい被害を生じた。多発生田は50%以上の減収となった。前年秋季の多雨と、7月4~5日および7月16~17日の浸冠水によって多発生した。禾本科雑草の保菌率が年々増加しつづけ、伝染源の増加と浸冠水時の気象条件が大きく影響した。佐賀の伊万里地区でも局部的に多発生がみられた。

福岡で一部小粒菌核病(小黑菌核)による穂枯れがみられ、また佐賀、熊本、鹿児島でも一部本病による坪枯れ症状がみられた。ごま葉枯病が鹿児島(普通期)で多発生し、福岡ではやや多発生となった。グラッシースタントは全般的にほとんど発生しなかったが、長崎で少発生ながら拡大傾向がみられた。

麦類病害のうち、近年とくに目立つことはさび病類の発生増加をあげることができる。本年は黄さび病が小麦を主体に多発生となり、品種間差がみられ、長崎では農林61号と比べてシロガネコムギ、サキガケコムギの発生が多く、福岡ではアサカゼコムギの発生が最も多く、ついでツクシコムギ、農林61号の順に少なかった。佐賀ではシロガネコムギ、アサカゼコムギの発生が多く、農林61号が少なかっ

た。大分では昭和41年以来の多発生、宮崎では43年以來の多発生となり、鹿児島では4月初旬から発生しはじめ多発生となった。赤かび病は3~4月の気温が高く、雨も多く、平年より多発生したところが多く、福岡、佐賀ではとくに二条大麦の発生が目立った。発生面積約56,000ha、面積率60%台に達し、年々増加の傾向がみられる。薬剤防除は一部分ではあるが実施する方向に向ってはいるが、まだまだ不十分であり、本病原菌の産生するマイコトキシンの毒性問題もあり、防除の徹底が望まれる。うどんこ病は4月上旬から発生が増加し全地域にわたって多発生となった。縮萎しゆく病は佐賀、大分で多発、熊本でやや多発生となったほかは並~少発生にとどまった。発生面積約5,000ha、面積率は約5%でほぼ横ばい状況であった。赤さび、小さび病が大分で多発生、鹿児島でやや多発、黒さび病が佐賀で多発生したほか、黒穂、斑葉病が大分で多発、鹿児島でやや多発、雲形病、網斑病が鹿児島で多発生し、株ぐされ病が宮崎でやや多発生した。

転作作物

大豆紫斑病の発生および被害ともに少なくほとんど問題とされなかった。紫斑病に対する薬剤防除が福岡の一部で実施された。新発生病害として大豆の苗立枯症が佐賀で多発生し、藻菌類による新病害として検討された。佐賀では葉焼、さび、黒根腐各病がやや多発生し、大分ではべと病が局部的に並~やや多発生した以外、ほとんど問題となった病害はなかった。ハトムギ葉枯病は全般に少発生にとどまった。サトウキビ葉片赤斑病、黒穂病、さび病が奄美大島でやや多発生したほかは並~少発生にとどまった。沖縄ではさび病がNCO376、NCO310ともに局部的に発生し、葉片赤斑病も局部発生がみられたにとどまった。

野菜・畑作物

全地域にわたって、ナス、トマト、キュウリ、イチゴ、ピーマン灰色かび病が多発生となった。薬剤耐性菌が広域にまた多く分布することもあって、防除体系の組み方が問題とされた。またナス、トマト、キュウリ、イチゴ、メロン、ピーマン、カボチャのうどんこ病がやや多発~多発生となった。キュウリ斑点細菌病、べと病が佐賀、熊本、宮崎、鹿児島、沖縄でやや多発~多発生し、菌核病が大分、宮崎で多発生した。トマト疫病が福岡、熊本、宮崎、鹿児島でやや多発~多発生し、ナス青枯病が佐賀、鹿児島でやや多発~多発生した。イチゴ炭そ病が福岡、佐賀で多発生し、タマネギ白色疫病、べと病が佐賀、大分で多発生した。メロンつる枯病、べと病は佐賀、熊本、大分、鹿児島でやや多発~多発生し、スイカ菌核病が宮崎、沖縄でやや多発~多発生となった。レタスべと病が福岡、佐賀でやや多発~多発生し、ニンジン黒葉枯病が大分、沖縄で多発生となった。

新発生病害は沖縄でスリップス媒介によるウイルス病、

スイカ灰白色斑紋病が発生し問題となり、またシュンギクベと病も発生した。佐賀ではタマネギ春腐病、キュウリ褐斑病が新発生し、福岡ではネギ萎ちょう病、長崎ではハクサイ根こぶ病が夏ハクサイに新発生した。大分ではタマネギ萎黄病（発生面積150ha）、ナス黒枯病、トマトうどんこ病が新しく発生した。各県で指摘した問題病害はレタス腐敗病（福岡）、ヤサイ類の灰色かび病（熊本、大分、宮崎）、サツマイモ帯状粗皮症状（熊本、鹿児島）、キャベツ根こぶ病、軟腐病、トマト青枯病（大分）、ピーマン斑紋病、ダイコン萎黄病（宮崎）、サトウキビ黒穂病、スイカ灰白色斑紋病（沖縄）などである。

ジャガイモ疫病が鹿児島で多発生したが、他病害は並～少発生にとどまり問題とならなかった。佐賀でジャガイモ粉状そうか病が新発生した。宮崎ではトウモロコシ褐条べと病が新しく見出された。

果樹・茶樹

カンキツかいよう病は全般的に半年並～少発生であったが、佐賀、熊本、鹿児島では多発生した。そうか病は熊本、鹿児島で多発生したほかは全般に半年並の発生にとどまった。黒点病は8月下旬から9月にかけての降雨により全般的にやや多発生となり、とくに熊本、大分では多発生となった。そのほか熊本、佐賀で褐色腐敗病が多発し、大分では灰色かび病が多発した。ナシ黒星病、黒斑病は全般にやや多発し、福岡、佐賀、大分では黒星病が多発、佐賀、熊本、大分では黒斑病が多発した。カキうどんこ病が福岡で、ブドウべと病が福岡、熊本で多発した。ピワがんしゅ病、ごま白斑点病が長崎で多発し、灰斑病が鹿児島で多発となった。モモ縮葉病が佐賀で多発した。クリ実たんそ病が熊本、

宮崎で多発した。

茶樹病害は全般的に炭そ病の発生が多く、福岡、大分、宮崎、鹿児島各県で多発生となった。もち病が熊本、宮崎、鹿児島で多発し、白星病が宮崎で多発したほかは全体的に半年並の発生にとどまった。新発生病害として熊本で輪斑病が、鹿児島で黒葉腐病と絹糸病がみられた。

（九州農業試験場環境第一部）

〔害虫発生概況〕

水稲・麦

海外からの長距離飛来性害虫のセジロウンカ、トビイロウンカ、コブノメイガが多発した。これら害虫の飛来波は九州南部・北部とも5波で、そのうち飛来量が多かったのは、南部では7月2日～5日と13日～19日の2波、北部では7月14日～18日の1波であった。飛来期間中の総飛来量は、半年に比べ3種とも各地で多かった。したがって、各県でセジロウンカおよびコブノメイガについて、7月下旬～8月上旬に相次いで注意報が発令され、トビイロウンカに対しては8月下旬以降であった。このような多発は、飛来量が多かったことと、とくにトビイロウンカでは8月以降秋期の異常高温の影響が大きかった。トビイロウンカとコブノメイガは飛来波が多く長期間にわたったので、その後の発生が不整一となり、防除適期を見出すことが困難であった。発生面積率はセジロウンカ71%、トビイロウンカ67%、コブノメイガ60%となった。

イネミズゾウムシは本来九州・沖縄ではじめて、意外に

1983年水稲主要病害虫の発生状況（発生面積 ha）

病 害 虫 名	福 岡	佐 賀	長 崎	熊 本	大 分	宮 崎*	鹿 児 島*	沖 縄*
(病 害)								
葉 い も ち	16,959	1,989	5,000	13,300	26,700	17,205	12,948	85
穂 梗 い も ち	24,429	2,894	2,500	11,700	28,200	23,074	14,748	12
紋 枯 病	33,206	8,983	15,000	27,900	32,200	28,072	28,019	169
白 葉 枯 樹	962	1,253	100	5,240	1,130	2,301	1	31
稈 枯 細 菌 病	25,543	14,077	8,900	13,020	22,400	9,378	19,784	—
縞 葉 枯 病	3,478	78	1,000	13	800	0	2,621	—
萎 縮 病	17,627	156	9,000	5,590	11,300	10,027	12,019	—
黄 萎 病	0	0	150	0	0	1	127	—
ご ま 葉 枯 樹	17,213	6,591	4,500	250	6,600	4,690	19,283	99
小 粒 菌 核 病	—	35	2,000	500	1,320	0	—	—
心 枯 線 虫 病	403	—	1,700	430	4,600	860	4,129	2
(虫 害)								
ニカマイチュウ(第1世代)	0	0	40	0	900	0	0	1
(第2世代)	80	0	40	0	700	0	0	1
セ ジ ロ ウ ン カ	53,241	21,801	21,900	31,500	20,400	27,034	24,776	247
ト ビ イ ロ ウ ン カ	51,109	19,461	21,900	33,400	20,100	16,663	27,976	88
ヒ メ ト ビ ウ ン カ	25,763	585	4,000	8,200	4,500	21,903	9,745	51
ツ マ グ ロ ヨ コ バ イ	54,841	27,456	15,000	31,500	19,700	29,276	33,558	219
イ ネ ッ ト ム シ	787	117	450	3,700	3,000	520	1,057	—
コ ブ ノ メ イ ガ	35,537	8,931	16,000	31,700	29,600	16,977	32,359	105
フ タ オ ビ コ ヤ ガ	73	0	70	300	1,500	416	164	—
ア ワ ト ヨ ウ	781	0	400	1,000	30	1,020	0	—
イ ネ ゾ ウ ム シ	2,380	507	2,020	4,500	6,500	2,961	2,552	—
カ メ ム シ 類	2,755	140	8,500	7,800	6,100	12,000	3,914	38

*早期・普通期または1期・2期の合計

も玄海灘に浮ぶ福岡県宗像郡大島村で発生した（福岡県特殊報第2号，58. 6. 3）。イネゾウムシは近年順次平坦地まで分布を拡大していたが，本年は各地とも広がり急速で，とくに南部の早期水稲地帯にもほぼ全面的に発生した。イネドロオイムシは数年前から福岡・大分両県の九重高原地帯に発生しているが，本年は隣接地へさらに広がった。吸穂性カメムシ類は暖冬のため越冬密度が高く多発が予想されたが，南部の早期稲では防除の徹底により被害は少なかった。以上のほか，長崎県の早期稲では，久しぶりにイネキンウバの発生がみられた。局部的ではあるが8月中下旬ツマグロヨコバイの異常多発がみられた（鹿児島）。

麦では佐賀県でヤノハモグリバエが本年も4月に発生した。発生地は川副町の干拓地のビール麦で，ビール麦と大豆の10年以上の連作圃場40haであった。

転作物

各地で大豆にハスモンヨトウが多発した。これは本年秋期の異常高温の影響で，とくに8月下旬以降急増した。一部では大豆から野菜やイチゴへ移り被害が発生した。大豆のカメムシ類は北部では多目のところがあり，そのほかシロイチモジマダヤメイが多かった（宮崎）。

野菜・畑作物

ミナミキイロアザミウマは周年露地発生で沖繩を除き，九州では一時期と比較すれば全般的に並～少の発生であったが，一部の施設ではキュウリ，ナス，メロンなどに多発したところがあった。施設では初期防除がかなり徹底した場合に被害が少なくなっている。近年，殺虫剤に対して感受性が低下し，防除が困難であった十字花科野菜のコナガは，昨年からピレスロイド剤が広範に使用されており，防除効果が高く，ほとんど問題にならなくなった。一方，オンシツコナジラミは各地で露地・施設とも多発傾向であり，また発生地が広がっている現状である。以上のほか，野菜で多目の害虫はタマネギのネギアザミウマ（佐賀），ショウガのショウガクロバネキノコバエ（長崎），トマトでヒラズハナアザミウマおよびこれの加害に起因する白ぶくれ症（長崎・大分），白菜・タカナ・人参にムギダニ（大分），イチゴでハダニ類とアブラムシ類（佐賀・鹿児島）などが主なものであった。

畑作物では，サツマイモでナカジロシタバ（鹿児島），

イモコガ（沖繩）が多目であったが，7月上旬防除が徹底したところでは食葉性害虫は全般的に並～少なめであった（宮崎）。

南西諸島のサトウキビでは，カンシャナガカメムシが多かった。沖繩では前年防除の不徹底地域でトノサマバツタ，セスジツチイナゴ，アオドウガネが多く，これは干ばつの影響もあった。同様にアブラムシ類やダニ類も多発し，防除が行われた。

我が国では未記録であったアルファルファゾウムシ（Alfalfa weevil, *Hypera postica* Gyllenhal）が，福岡県の一部および沖繩本島で発生した（農林水産省横浜植物防疫所，58. 11. 15）。本種はヨーロッパ原産で南米・豪洲を除く世界に広く分布し，アルファルファの重要害虫である。現在，我が国では農作物での加害は認められておらず，マメ科雑草に寄生している。我が国への侵入期口及び経路は明らかでないが，両県での発生状況からみて，かなり以前に侵入したものと考えられている。幸に九州・沖繩にはアルファルファはないが，今後発生分布の拡大に伴って，他のマメ科作物への加害に注意しなければならない。

果樹・茶樹

各地でカメムシ類がカキ，カンキツ，ナシで多発した。前年スギ，ヒノキの実が多く食物が豊富であったこと，暖冬で越冬量が多く，秋期の高温などが主因である。カンキツでは6～8月に落果，早生種では収穫果にも被害がみられた。全般的に多かったのはカンキツやブドウでチャノキイロアザミウマを主体とするスリップス類およびクワゴマダラヒトリ，カンキツやカキで果実吸蛾類などであった。以上のほか局部的には，カンキツで第1～3世代ともヤノネカイガラムシ（熊本），ゴマダラカミキリ（宮崎・鹿児島），ミカンハダニ（鹿児島），クリではクリタマバチが管理不良園や老樹を中心に多目であった（熊本・大分・宮崎）。

茶樹では，各地とも全般的に多かったのはチャノミドリヒメヨコバイ，チャノキイロアザミウマなどで，とくに7月中旬以降の高温の影響が大きかった。以上のほか，ヨモギエダシャクが夏期全域に（鹿児島），カンザウハダニ（大分），クワシロカイガラムシが7月と9月の第2，3世代に（福岡・鹿児島）多かった。

（九州農業試験場環境第一部）